

REDEMPTION

後藤勝彌*

人間は自分がしたことの責任からぜったいに逃れられない。 (ジャン・ポール サルトル)

75歳くらいまでは現役を続けられる気力、体力、技術を維持して来たつもりだが、次第に病院の管理職へと追いやられて来た。医療事故、医事紛争、院内暴力、クレーマー対策などのリスクマネジメントが仕事の大半を占めていたが、その一方で、良き指導者に恵まれて、人間心理にも目が開かれていった。そのようないきさつで、心から愛した脳血管内治療の世界を完全に離れて2年余りが経った。現在は脳血管障害、神経難病、認知症などの終末期患者の訪問診療に従事している。終末期にあっても、懸命に生きようと努力する人々の生命力の神秘に打たれるとともに、自己の全一性を取り戻して安らかに死んでゆく人とその家族の織りなすドラマをつぶさに観る感動に満ちた毎日である。その一方で、脳血管内治療事故の後遺症に悩む患者さんや医事紛争のコンサルテーションにも与って来た。このように社会の真ただ中に身を置いた者に見えて来ること、病院の奥まった場所にある脳血管内治療室で、日々押し寄せて来る脳血管病患者の治療に追われる生活の中では見失われがちな事柄に光をあてて、諸兄姉の参考に供したい。

脳血管内治療は近代医療の華と呼ばれるにふさわしい、祝福された世界だったことを、改めて感じる。次々に難度の高い手技に成功し、多くの患者が紹介されて来るようになると、自分の全能感が増して来がちである。とかく医師は〈力と有能性〉を求めて突っ走る存在である。しかし、弁護士の資格を持ち脳神経疾患診療に従事している医師達も指摘する通り、脳血管内治療は医療のなかでも最もハイリスクな領域である。なまじ手を出し

* 大田記念病院名誉院長

たばかりに患者の人生設計の全面的な変更を余儀なくさせるような結果を招いたり、完治可能な疾患を治療不能としたりといった事態が生じていることに思いが至っているだろうか？ これまでの医学教育は医師に、何よりも科学者としての客観性を求め、患者の内的な世界とは距離を置くべきだと教えて来た。それで治療の必要性や危険性の評価といった技術的な局面のみに専念して、患者自身を見るのが疎かになっていなかっただろうか？ 医師としてのみ振る舞い、一人の人間として相対して来なかったのではないか？

90年代の終わりに本学会の学会長に任ぜられて行ったのは会員を対象とする〈重大な合併症が患者・家族と治療医に及ぼす心理的な外傷〉のアンケート調査だった。その結果**は衝撃的だった。なんと半数以上の会員が重篤な合併症を経験して、家族から厳しい非難をあげたという経験を有しており、そのうちの少なからぬ部分が診療を続けることや患者や家族と向き合うことができなくなったという事実が明らかになったのだ。我々が燃え尽きるのは患者の心理を気につけないからではなく、近代医学教育が根本的な所で間違っていたからだ。この世界で最も重要視されて来たのは決断力、客観性、有能性、判断力、分析的思考力である。だが、解剖、生理、生化学、薬理だけに頼る頑なな心の持ち主に、それより遥かに大きく複雑な存在である人間存在の神秘を理解することができようか？

最初の発表から10年余を経て、社会事情の変化に伴い患者-医師関係も大きく変化したが、重篤な合併症がその双方に引き起こす心理的な外傷を乗り越えるメカニズムは変わっていない。共に自分が所属する集団や国の文化・伝統から力を汲み取っていることを海外で開催さ

れた脳血管内治療のワークショップや学会でも講演した。「悲哀感情を単純に乗り越えないで、自分にとって原体験というべきこのような悲哀感情をしっかりと見詰めることが医師としての成熟につながる。シュバイツァー博士が『すべての人の心にはランパレネがある』と説いたように、すべての日本人の心にはヒロシマ、ナガサキがある」と話を展開すると、聴衆の熱烈な賛同を得ることができた。そのとき、諸外国は日本を〈古来、数多くの自然災害や戦争の惨禍を乗り越えて来た大災害の先進国〉と看做していることも知った。そして、この話は是非英語で書いて欲しいという多くの要望を受けた次第である。また、そのような機会に努めて若い人々と個人的にも話すようにして来たが、みな今次大戦のことも、被爆の実態も余りに知らないことに大きな危機感を抱くようになった。アメリカの元国防長官・マクナマラが「核拡散が進んだ現在、ちょっとした手違いで核戦争が起きる可能性は、かつてなく高まっている。21世紀が核戦争を見る可能性は相当高い」と述べているにもかかわらず……。

脳血管内治療医としてのキャリアを終えた広島県の脳卒中専門病院は井伏鱒二の黒い雨の舞台となった所に在り、まだ身の回りには相当数の被爆者が居た。ここでも医療従事者をはじめ、身近に居る若者の被爆の事態に関する知識や、世界の核の危機的な現状に対する関心は薄かった。これは長崎で生まれて、果てしなく広がる原子野が記憶の始まりであった者としては看過できない問題であった。そのような問題意識が小説の執筆へ向かわせたのである。それで、〈脳のAVMを持つ広島崩壊家庭の少年が、導師たる高齢の医師と長崎を経て400年間の時空を越えた世界の旅をして蘇り、社会復帰を果たす〉といった筋書の「長崎飛翔」を2年前の本学会総会直前に上梓した。原爆投下の問題は、これまでとかく終末兵器開発の経緯や、戦後世界の核支配のパワー・ポリティクスに重点が置かれがちだった。この小説では、中世から近世への移行期にまで遡って原爆投下を招いた日本の近代化の問題にも光を当てた。〈力と有能性〉の一端な追求がもたらすものは何なのかを若い世代に自分の頭で考えてほしいと願ってのことである。

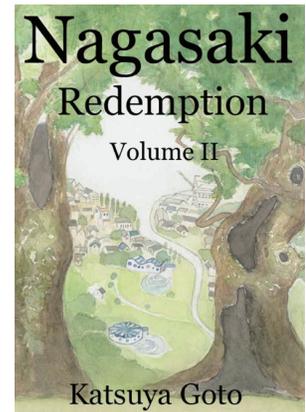
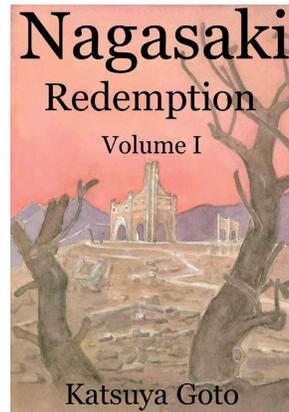


図 Nagasaki Redemption I, IIの表紙

とかく「過ぎ去った昔のことなんて、ピンとこない」「自分には関係ない」と言いがちな若者の興味を引き付けるために、脳血管内治療のシーンをふんだんに取り入れ、「時とは何か」について主人公の少年に物理的、哲学的、宗教的にじっくりと考察させる手法を取ったので長い話になった。次に取り組んだのは、未だに殆どの人が原爆投下の正当性を信じるアメリカを初め、海外の友人達にも読んで貰うために英語版を作ることだった。2年の年月をかけ、一流の翻訳家の手も煩わせて Nagasaki Redemption Volume I & IIを Amazon から online 出版した(図)。英文の論文執筆や、国際学会で外国人と交流して英語力や近代史の知識不足を感じられている諸兄姉にも是非読んで頂きたい。先日来日した映画監督 Oliver Stone からは日本人はもっと世界に向かって発言し、核廃絶のための努力をするべきだと繰り返し叱咤激励されたので、11月末に Los Angeles に出掛けた折に同監督と1時間の会見を果たして来た。世界で最も会うことの難しい男と言われている監督は、「自分の reader にこの小説を読ませているところだ」と言ってくれた。

今回の Los Angeles 訪問のもう一つの目的は Grant Hieshima のお見舞いにあつた。Grant Hieshima といっても分からない世代が増えているかと思うが、脳神経血管内治療の真のパイオニアで、多くの日本人の専門家を育ててくれた恩人である。2度に渡る冠動脈の3枝バイパスを乗り越えた先生からは「日本の皆さんの活躍をいつも見守っている」とのメッセージを頂いた。

* * Goto K, Noda M: Grieving over complications associated with neuro-endovascular treatment. Interv Neuroradiol. 2001 Sep 30;7(3):181-90. Epub 2001 Oct 15.